



天童隨筆

天童 漆山又四郎輯

○宋胡瑗字翼之號安定先生讀書泰山攻苦淡食十年不歸得家簡見上有平安字即投澗中不復展讀韻府平安之注

○董遇不肯教人而云必當先讀百遍言讀書百遍而義自見魏志

王肅傳注

○支那ノ俗人ヲ送ルニ王维ガ陽關ノ詩ヲ唱ツテ餞ケトスル例ナルカ、其已前ニハ五雲天上來、三星月下擎、猿啼無滴淚、花落不聞聲トイヘル詩ヲウタツテ別レタ。五雲ノ句デハ酒ヲ盛り、三星ノ句デ三指ヲ以テ盃ヲ捧ゲテ酒ヲ飲ミ、猿啼ノ句デ一滴モ残サズ酒ヲノミ、落花ノ

85
80
75
70
65
60

句テ孟ヲ傾ク振リ試ミ全ク盡キテ示ス。猿啼無滴涙ハ猿
ハアマ^麗ニ啼クハ後ハ涙ガ無クナルモノナリ其意ヲ取レ
リ。素^麗和尙三解詩抄

○真字、五經デハ見當ラヌ、楚莊子ニハヨク見ル

○蘇民將來ト庶民子來。蘇民將來ハ簞簋ニモ備後國風土

記ニ^ト人トアリ、雍州府志ニハ神トシテ祇園第一攝社

也トアリ(蓋元人名)、又神代記合解ニ巨且將來ノ見トアリ

簞簋ニハ南天竺ノ夜叉國ノ人トアリ、神代紀ハ素盞高尊

ニ宿ラ借シ夕善良ノ人ニナツテ居リ、又下學集ニハ蘇民

將來ノ註ニ懸神符於衣袖則縱雖死人、蘇生來故云也トア

ル。然ルニ詩經ノ文王之什靈臺章「經如靈臺、經之營之

、庶民改之、不日成之、經始勿亟、庶民子來」ヲ讀ムニア

△[△]忘れのり[△]ニアル。
× 鬼長門守の正月松飾ニ蘇武將來子孫家ト書イタ札ヲ掛ケタト、△

タリ、必公頭ニ思ヒ浮ブトハ蘇民將來ノ語テ、何等カノ

河邊カラ庶民子來ガ蘇民將來ニ轉訛シタノテハナカラウ

カト考ハラル。○因ニニ言フ、江戶八町堀ニ住セ九九

○詩要體會。楊龜山曰、詩全要體會、何謂體會、且如関

雎之詩、詩人以興后妃之德蓋如此也、須當想像雎鳩為何

物、知雎鳩為摯而有別之禽、則又想像関々為何聲、知関

関之声為何、則又想像在河之洲、是何所在、知河之洲為

幽間遠人之地、則知如是之禽、其鳴声如是而又居幽間遠

人之地、則后妃之德可以意曉矣、是之謂體會

○文・字・書。漢許慎說文序云、倉頡之初作書、蓋依類

象形、故謂之文、其後形声相益、即謂之字、字者言孳乳

而浸多也、著於竹帛謂之書、書者如也、以迄五帝三王之

世、改易殊躰、封於泰山者、七十有二代、靡有同焉、

○悞字之解。悞惱也・貪也・愛忤也・恨也、蓋人情因愛

生惱、終為悞恨之意、解得而妙
○悲愴ダカ而モ詩的ナノハ尺八ヲ吹イテ盲人ガ乞食シテ

居ルノヲ見タトキ聞イタトキ(聞ハ尺八ノ音)
○生キ甲斐ノアルト思フノハ愛讀書ノ薄葉摺デ而モ印刷

鮮明ノモノヲ購ツタトキト脚立テ青鱈釣ツタトキ
○愚ナルハ新緑ノ晴天ニ高人ノ居番スルノト、官更ノ倚

子ニ腰掛ケテ居ルノト
○都程ノ鐵網珊瑚ニ三躰詩失頭ノ作者杜常ヲ唐人ニ非ス

シテ宋人ナルヲ考證シ、中ニ歲在癸酉余以使事至陝道經
臨潼浴驪山之溫泉見石刻中有此詩乃秦鳳等路提點刑獄公

事太常丞杜常作其詩云東遊家鄉十六程曉來和月到華清朝

元閣下西風急都入長楊作雨聲云トアリ、然ルニ三躰

詩載スルトコロノモノハ行盡江南數十程曉風殘月入華清

朝元閣上西風急都入長楊作雨聲ナリ、天童謂フニ周弼杜

常ノ此詩ヲ見テ見ルベキアルヲ知り、三躰詩載スルトコ

口ノ如ク改作セバ全ク晚唐ノ格調トナルヲ以テ己自ラ改

作シ杜常ノ何ノ代ノ人タルナドハ等閑ニ取リ扱ツテ晚唐

諸公ノ中ニ入レタルナルベク、此詩基石ハ固ヨリ杜常ナ

レドモ實ハ周弼ノモノナリ夫己自ラノ作ヲ卷頭ニ入レタル

耳トイハレオボヤ寧ロ騷人ノ飄逸愛スベシ

○兼穂録尾張ノ文學岡田挺之ノ隨筆春秋傳十左傳の句

瀆之丘ハ即穀丘ナリ句瀆の反音穀ナリニ合の音自然又古

よりあるなるトアルヲ日本隨筆大成(昭和七年十月)に兼穂録ヲ校刊シテ春秋傳の句讀、之丘
修官田邊勝哉(昭和七年十月)ニ兼穂録ヲ校刊シテ春秋傳の句讀、之丘
は、即穀立ナリ。句讀の反音、穀ナリ。云々トアルヨリ
續日本隨筆索引(昭和七年十月)ニ之丘春秋傳の句讀ト見出
シタル、誤謬ノ誤謬、一音羣音ヲ引クト云フベキナリ
○太平記ニ、村上孝四郎義光が、大塔宮ニイツハリ代リ
奉リテ、自ラ死ナムトスル時ノ詞ニ、我ハ後醍醐天皇ノ
第二ノ皇子云々、ト云ヘリ。其時ハ、後醍醐ノ帝ハ、未
ダ世ニマシ、シ程ナルニ、イカラカ後ノ御謚ヲバ申サ
ム、記セル人ノ辭言也。此類、カヲ書ニモアリ、史記ノ
田齊世家ト云フ條ニ、齊國ノ人ノ歌ニ、姬宇采芭、婦字
田成子、トウ夕ヘル由記セリ。成子ト云フハ、田常トイ

フ人ノ謚ナルヲ、コレモ其人ノ、未ダ存在シ程ノ事ナリ。
左傳ニモ、此類有リシヤウニ覺ユルヲ、ソハ忘レタリ。
(本居宜長慕玉勝間、未ダ世ニアル人ノ事ニ謚ヲ云ヘル誤)
○皜、日光之白也。皎、月光之白也。皙、男子之白也。
皤、女子之白也。皤、老人之白也。皤、霜雪之白也。葩
、草華之白也。皤、鳥羽之白也。
○骨董ノ語、本定字ナシ。舊ハ古董、朱文公ハ汨董ニ
作り、東坡初メテ骨董トイヘリ。(九桂草堂隨筆)
○五音集韻ニ擧字ヲ解シテ曰ク、子役切音積人死作鬼人
見懼之、鬼死作擧鬼見怕之、云々。鬼ノ死スル鬼ニアラ
ザレバ見ル能ハズ、擧ハ鬼ノ作りテ鬼ヨリ人ニ傳ヘシ字
歟。

○陳氏茶略中得趣則

飲茶貴得茶中之趣。若不得其趣而信口哺啜，其嚼蠟何異。雖然，
趣固不易知。知趣亦不易。遠行口乾，大鍾劇飲者不知也。酒酣肺
焦，疾呼解渴者不知也。飯後嗽口，橫舌直飲者不知也。井水濃煎，
鐵器慢煮者不知也。必也。山窓涼雨，對客清談時知之。中竹樓待
月，草榻迎風時知之。梅亭樹下，讀雜賢時知之。揚柳池邊，聽黃鸝
時知之。知其趣者，淡斟細嚼，覺清氣透入五中，自下而上，能使兩
頰微紅，於月溫氣不散，固身和暖，如飲醇醪，亦令人醉然。第語其
大畧，至于箇中微妙，是在得趣者自知之。若涉後言，便落第二義。
○平重盛忠孝兩全の不能なるを嘆じ死を神と祈りしこと、
齊の石先生も亦うれ有り、韓詩外傳記して曰く、日常蘇簡
公乃盟于國人曰、不盟死及家、石他曰、古之事君者、死其君之

事、舍君以全親、非忠也。捨親以死君之事、非孝也。他則不能、然不
盟是殺吾親也。從人而盟、是背吾君也。嗚呼、生亂世不得正行、劫
乎暴人、不得全義、悲夫。乃進盟以免父母、退伏劍以死其君、聞之
者曰、君子哉、安之命矣。詩曰、人亦有言、進退惟谷。石先生之謂也。
○石と虎とありしを見て射て鏃を没せり者、漢の飛將軍李
廣のみとありしに、韓詩外傳に曰く、昔者楚熊渠子夜
行、寢石以為伏虎、彎弓而射之、沒金飲羽、下視知其為石、石為之
開、と曩にも熊渠子に例ありしなり。因み又史記の李
廣傳の一節を轉載せん、上畧、廣出獵、見草中石、以為虎而射
之、中石、沒鏃、視之、石也。因復更射之、終不能復入石矣。又支
那の俗傳と覺ゆ、父を虎に喰はれし存子、敵を討んと山を
行き、石と虎と見て射て、刃を没せり事、むしり俗書で見た

るも今では忘れり。ついでに福田行戒の歌に、荒岸
の試事と題して「魚をくちて石もさやけくらくらひきり
ゆるめり」魚のほろい心

○莫愁の姓、盧。廣輿記曰、「莫愁湖、三山門外昔有妓盧
莫愁家此故名。蓋三山在江南江寧府

○莫耶山、廣輿記、江南廬州鳳陽府三條曰、「鑛錫山府城
南、昔人鑄劍於此」

○石龜の眼赤くして地陥り湖と為る二説あり。一、述異
記曰「和州歷陽淪為湖、昔有書生遇一老媪、媪待之厚、

生謂媪曰、此縣門石龜眼血出、此地當陷為湖、媪數往見
之、門吏問媪、媪具答之、吏以朱點龜眼、媪見遂走上北
山、顧城遂陷焉。今湖中有明存魚・奴魚・婢魚」二、廣

輿記、江南廬州府條曰「巢湖。合肥世傳、江水暴漲溝有
巨魚萬斤三日而死、合郡食之、獨一媪不食、忽遇老叟曰
、此吾子也、汝不食其肉、吾可乞報耶、東門石龜目赤、
城當陷、媪日往視之、有稚子戲以朱傳龜目、媪見急登山、
而城陷為湖、周四百餘里。一は書生、二は老叟。一は門
吏、二は稚子。一は書生に食けて報あり、二は魚肉を
食はずして報あり。一は門吏の惡戯、二は稚子の稚戯。
一は和州歷陽湖、二は廬州の巢湖。

○廬生邯鄲の假睡、王質石室山の斧柯爛盡、一は一炊の
間永く五十年となり、一は斧柯爛尽の永き間は一暴曲と
見る、廬生に得ありて王質に失ありとり之し。我は素核
をもとのすして、呂翁の枕をかり

六

の光統律師と論議して勝ちし達磨は毒殺されしなり
 ○六宗の名流にあらざる、四宗の名流なり、南無は名号に
 あらざる、帰命と譯すや語なり、河湍陀傳は名号なり。
 兼じつむらば河湍陀の三宗こそ眞の名流なり
 ○寺の什物を交割とりし、割符を交ゆる言あり
 ○正直は自慢にまがふ、非を非とすは訛にちかく、是
 を是とすは諛にちかし。萬事は黙するに如かず、黙も
 亦意地悪に見ゆ。畢竟は俗に交はらざるは頭善とす
 ○宗祇の九州道の記などを讀むに大名と近付きなるを
 諷諷にすやうに感じしめて、これに俗物の骨頂と思ひ
 しに、箱笥を啓む時に櫻井元佐の賄賂せざるを以て其
 歌をいざりしといふはいふに以て俗をあらはせり。元

佐の歌に「あゝなくてのそりかぬる箱笥山初歌の道
 には違者なれども
 ○千利体の俗物なりはりに足らず、これに前科物者なり
 諸書に敬見する送話略傳を見て知るべし
 ○杉尾芭蕉も喰せしものなり、種とりよぶとぞありと、
 更科紀行の二節を見て余の証をなすを知らし、曰く
 上界の世に於ては其の言なり、矢立取出て燈のうちに目をと
 ち頭をうつよとてめさば彼の道心の坊(途中道連
 と有りし)を名取主たりし。旅情の心憂くても物思ひするに
 やはるも我を厨のんとす、若し時節なめたりたし地・
 阿ふこの尊ぶぬと感ずし。おのが阿ふしと感ひしやうど
 も感つゝを風情のさけりと取て何を言ふことにも

さす

藤柳の文でもあらばそれが高が更科終りを作つた目をと
結頭をもくきてうめき伏すさへありに風雅をなすは御
士も似ず道心切の物語をうるがりしは何事をもいづれ
大勢の弟子を遣ふものは由來俗物が多い。佛も奥
の細道は名文だ、芭蕉に奥の細道がなかつたらうば、唯
雪喜角輩と同等の人物だ、芭蕉の句に
水仙や白き陰子のともうつり
世人此句に無限の俗調あるを悟り知るべし、此の俗調を
熟知して後、真の鄙人なまじり

○西行は偉人なり、千右の一人なり、日本の坊主では道
元禪師と西行法師二人なり。

○世説に隱公左傳・桐壺源氏といふ語がある、そのは左
傳面白りうずうし隠公のみで止め、源氏物語も興味なく
して桐壺の巻のみで讀み止むといふなり。薩摩の或武
人が、山豆餅の搦手ササマシ持つと男が源氏物語なと止めある
かと罵つたといふ、余も同感なり、余は常々本を讀ん
で止めたり。左傳は半月かきりて全部讀みたり、雪井翁
雄は一夜で讀了りていふ、余は十五日かたりたり。
○大鏡や紫花物語を讀みざるは怠惰なり、源氏を讀む
は有閑の思人なり。物の哀れを知るは源氏然りし、それ
と根柢しうり出たる哀れなり、事實を述べたる
る平家や源平盛衰記などとも優に哀れは知り得ずし。
○伊勢物語の作者に就いては古本決定なし。業平一生の

九

車を祀しおけるを、伊勢が又車をかへて一部の物語とも
りとし少は左もあつし。他に後左の出でざる上は、そ
れもてこころ濟し、外に穿鑿するは所謂贅言なり。
○清少の枕草紙は唐の空寂山の雜草より出でたりとらふ
説あり。鑿の思きたるものなり、其の唐の思や及ぶべか
らず。青持の如く近代意はあらざるだけども九牛一毛
ほど似通つて處ありとて、驟と断ずるは、附屬者流の事こ
○青持は俳諧の點者なり、よく近代意の事をいつて平然
たりしとらふ。とりて近代意の事を青持といふやうにな
り、現代の人、口よりほゞし、事なく、又大なるな
知らぬげなり。

○長宗我部は千ヤウスガメと訓むべきものか、正徳六年

刊本俗説贅辨に目錄にも本文にも此く振假字あり。
○俗説贅辨中茶式の説とありあり、點頭る節は抄す。
世俗之茶の湯の士の礼法を記してふ付事なり。今按す
るに非なり、世よ交るるに座敷なりとありを後す
るは不得已なり、茶式の前は筑前國崇福寺岡山南浦
紹明正元の頃入宗し徑山寺虚堂の嗣法し文永四年に帰
朝なり、其頃其子一かたり徑山寺より携来し崇福寺の
什物とす是少茶式のものありや、後其子を崇野大徳
寺へ贈り又天龍寺岡山夢想へわたり善定此基子としち
やのゆをとり茶式を定むらふ、如地僧ありけし
やうし事おぼやかしく鐘鐘本を用ひ大小剣を
帯とす皆僧寺の行儀なり、是よりそ不慮の殺害

有りし事あり、又盜来りて大小剣を抜取りし事あり、
石堂いしどうより多し、習てまゝにゆくあり、垂加翁しゅうかおん（山崎園
齋わさき）大和おほの事より福あり、近時利休など茶式よ
ふけり古器古畫をあまをひ馳は衛ゑも恥ぢせどる界
方千萬の行ひ有し、秀吉譜より出たり、聞くそ
ろろさき事ありあらず也、玩物喪志古聖の深戒也。

○陸樹声曰、李翱復性篇主排佛也而間用其言、王坦之廢
莊論以反莊也而多襲其語此文章家之標幟入室者、余謂柳
宗元作非國語亦多以國語為法

○乙州著水く草（享保四年刊）の一節

難波の磯久は川口に遊び居て、あやまりて水の深みへ
落ち入り既に沈み失をんとす、折ふし營いほの心なく

飛び来りて見て水中より片手をさす、是こ帶おびより小
声げうりとせぬ限りとて終に底の水層と失なしとなり

○又一節

難波の葉は葉は賣うりは常に酒を好みて瓢を腰につけつ、
長日第ついでよりありさけろが懐より土のく形ニツ取り出
し太郎兵衛・新兵衛と名を呼ぶ、酒の相手として樂たのむ
、或人面白き由ゆゑと尋て酒をせんと呼入れれば、
第喜あは笑うて我汝等と相手して樂たのむ心常とこなりし、
こころの新号あたらし号あたらし海うみの我心こころも隨まり我われ心こころも隨まり
考かんむ我心こころも隨まり歸かへり唯一ひと口くちもすむ捨すて行いくとなり。

○土佐國長宗我部氏系圖

俗間の軍記に土佐の國主長宗我部元親の父を元國とす

元國の父を元為と記しと記し

今案すゝに非なり、秦氏系國曰秦家根源秦始皇也、自
始皇六代種之時來朝、仲哀天皇賜秦姓、聖德太子諱守
屋時歿十五代孫河勝有功、其末葉受任土州、後辭任而
留當國、仍賜長曾我部本領於兄弟、居於國之左右、代
代如此、一人國澤是也、始祖能俊——俊宗——忠俊——
重氏——氏幸——滿幸——兼光——重俊——重高——
重宗——信能——兼能——兼綱——能重——元親——
兼兼——元門系雄親子能雄親——兼序——國親——
元親 右世嫡二十一代見系國、元親下り後は系國又載
せり、今案すゝた、元親嫡子滿三信親、天正十四年
豊後國戸波川よおいて増津氏と親以討死、倉弟土佐守

登親大坂、河城、元和元年六條河原に斬らる。天章集の

敗軍は亦芳の後井伊掃野頭の京備は敗られしをいなり、あつて今輩中前後

○俳諧のさし合に軽重あるより、立羽不角南之合子翁著

の俳諧清鈍に軽重徳と題して一章あり、左に其の大槪と

語例の珍らしきもの抄出たり

凡そさし合に輕重あり、輕き文字は書かへずは二句

去又成ル重き文字は二句まはゆるし如く、隨句思

慮者へし、たとへば臆の字訓ツキイツルカ夕子とよめ

る以月よ二句去く、イヅルカ夕子ハ意ハ訓句カ夕

子も出るも不嫌、月出るかくちとは月の水離れの

如く不んちりと白し、たとへば霞の物を霞ふとるやう

くとの心故に霞ふ二句嫌、月も二句去く、餘と是と

十三

て考ふべし、先文字向て是る三句去、五句去かを定むし、三句去の文字ならん書替有る二句と心得たあ、所謂文字無量なり九牛の一毛を顯すものこ、外ハ手前々、の力を以て定むし、文字の握屈明か成り付て判るも、思ひ誤りも有るや。

(ア)

關 アケツク、明ニ立ニ 空 アノホル、穴ニ 門 アノダ、其意アリ

踏 アシベウシ、足ニ 踏 アハテル、上ニ 依 アヒナシ

善 アツイタ、有ニ 朱 アツマ、周ノ 明日 アスナラフ、明日ニ

中 アセトリ、汗ニ 阿 アコブセウ、面ノ 古 モ 千 チ 種 モ

阿 アコブセウ、面ノ 好 コト 血 チ 汗 アセトリ 再 アコブセウ

(イ)

句 イヒアラス、云ニ 當 イヒアラス、云ニ 既 イヒル、言テ 切 イヒル、言テ

般 イニスル 居 イニスル 曲 イリエ 江 イリエ 籟 イケス、生ル

立 イタメリ、秋ニ 往 イタメリ、秋ニ 行 イタメリ、秋ニ 句 イタメリ、秋ニ

紙 イタクシ、糸ニ 屑 イタクシ、糸ニ 精 イリモチ、餅ニ 債 イタクシ、糸ニ

主 イハトウシ、家ニ 人 イハトウシ、家ニ 女 イハトウシ、家ニ 接 イリムコ 脚 イリムコ 夫 イリムコ

孰 イカニシテ、如何ニ 謂 イカニシテ、如何ニ 白 イカニシテ、如何ニ 氏 イカニシテ、如何ニ 集 イカニシテ、如何ニ

細 イナクネ、細ニ 舟 イナクネ、細ニ 上 イナクネ、細ニ 川 イナクネ、細ニ 鼻 イナクネ、細ニ 子 イナクネ、細ニ

南 ウスゴリ、智ニ 阿 ウスゴリ、智ニ 衡 ウスゴリ、智ニ 浮 ウスゴリ、智ニ 斯 ウスゴリ、智ニ

竿 ウシ、家の 建 ウシ、家の 具 ウシ、家の 之 ウシ、家の 牛 ウシ、家の 之 ウシ、家の 煙 ウシ、家の

鳳 ウシ、家の 尾 ウシ、家の 草 ウシ、家の 牛 ウシ、家の 舌 ウシ、家の 草 ウシ、家の

夜 ウシ、家の 台 ウシ、家の 藤 ウシ、家の 山 ウシ、家の 辟 ウシ、家の

嫌 ウシ、家の 五 ウシ、家の 句 ウシ、家の 當 ウシ、家の 山 ウシ、家の 辟 ウシ、家の

打 ウシ、家の 取 ウシ、家の 其 ウシ、家の 言 ウシ、家の 句 ウシ、家の

打 ウシ、家の 取 ウシ、家の 其 ウシ、家の 言 ウシ、家の 句 ウシ、家の

(コ) (ケ)

錘彫 ケホリ 獎 ケカクル 燻 ケフタシ
樟皮 ケビ 聲 コエ 橙 キ 柳 ヤナギ 駒 ウマ 笛 フエ

(サ)

鞍 ウマ 轡 ウマ 沙 サ 箭 ヤ 眼 メ 靴 カブ 走 ハシ 史 シ 記 キ 注 チュ

(シ)

當面 サシ 相 アイ 向 ムカ 刺 サス 挺 ツツ 評 ヒヤク 日 ヒ 上 ノ 遊 ユ 偵 ヒ 口 ノ 上 ノ 湖 ウミ 謀 マカ
下馬 ゲバ 弄丸 リウワン 翟 チ 蘭 ラン 花 ハナ 不 フ 嫌 ケン 箭 ヤ 眼 メ 靴 カブ 走 ハシ 史 シ 記 キ 注 チュ

(ス)

越瓜 セツ 白 シロ 不 フ 痘 トウ 夢 ユメ 門 カド 冬 フユ
龜文 カメ 文 モン 直 ナカ 漫 マン 理 リ 亂 ラン 文 モン 陽 ヤウ 漫 マン 理 リ 陰 イン

(ソ) (セ)

蝦 エビ 樓 ロウ 光 クワウ 醜 ウツシ 繩 ヒツ 不 フ 世 セ

(タ)

軒 ケン 執 シツ 車 シャ 不 フ 世 セ

(チ)

埃 アヒ 墨 ボク 景 ケイ 天 テン 草 ソウ 身 ミ 柱 チウ 不 フ 世 セ 裱 ヒョウ

禪衣 チヤ、千早、俗ヤ、千早、俗ヤ、千早、俗ヤ、千早、俗ヤ

揚 ツルシヤキ、釣ふ煙、客作兒、捕、日備、手取

塔 ツルシヤキ、釣ふ煙、客作兒、捕、日備、手取

罐 瓶、釣、客作兒、捕、日備、手取

閨 本、教、手、白、手、手

悅 架、手、手、手

標 架、手、手、手

威 贅、手、手、手

連 牆、手、手、手

旁 及、手、手、手

執 柯、手、手、手

甘 從、手、手、手

珍 俗、手、手

鯁 魚、手、手

鯽 魚、手、手

駟 馬、手、手

駟 馬、手、手

駟 馬、手、手

(ヒ)

美女金

鐘ノ中ニ動ク金在ルヲ云フ、意ニ非ズシテ外ニ美女ハナシ

副車 ヒトタテ

日長ノ里

病トモテ、病ノ好ノ先ニアリ

十二月晦日村日

和州

天泣 ヒナリ、日ニ照シ、雨ニ三

開 ヒナリ

權 ヒトツバ

略 ヒナリ、日ニ照シ、雨ニ三

助鋪 ヒナリ

趙 ヒナリ

船 ヒナリ

類 ヒナリ

小具將 ヒナリ

鯉 ヒナリ

蔭堂 ヒナリ

布泉 ヒナリ

神馬藻

但音ニ思ハレ、沖ニ馬ニ藻ニ云

外持 ヒナリ

廩軍人

ホシホチ、糶米久ク入倉ニ陳ノ者

鎖袂 ヒナリ

叩子トモ書ク

但音ニ思ハレ、沖ニ馬ニ藻ニ云

鎖袂 ヒナリ

神馬藻

但音ニ思ハレ、沖ニ馬ニ藻ニ云

鎖袂 ヒナリ

叩子トモ書ク

但音ニ思ハレ、沖ニ馬ニ藻ニ云

鎖袂 ヒナリ

(マ)

板齒

南刺 マノ

區 マキ

(ミ)

馬

牛屎蔬 日ノ上

野蜀葵 ヒナリ

(ニ)

刷

山都 見ニ敷

給 ヒナリ

(ム)

法用

婉轉 ヒナリ

給 ヒナリ

(ム)

檜

霜梅 梅干

給 ヒナリ

(ム)

掲車香

寂煩 ヒナリ

冷眼 ヒナリ

(メ)

照星

寂煩 ヒナリ

冷眼 ヒナリ

(モ)

綾威

榎 ヒナリ

酶 ヒナリ

(ヤ)

格

耶麻堆 ヒナリ

後漢書 ヒナリ

(モ)

綾威

榎 ヒナリ

酶 ヒナリ

(ヤ)

格

耶麻堆 ヒナリ

後漢書 ヒナリ

月見里ヤマナシ 二句
 錫ヤハバ、八重ハヤヒ、蓮ハス、折マ、夾ヤセ、トロ、不レ、燈ト、繁ハ、弱ヤ、史シ、記キ
 燿ユキ、温ニ、二句
 殮ユツク、飯イ、積ツク、二句
 原ハラ、夢ユメ、六ム、神カミ、雪ユキ、五イ、句
 解トク、手テ、刀ヤ、鏡ヨロ、折ヒ、通ト、二句
 篋コト、函コト、人ヒト、委ユキ、行ユキ、二句
 四ヨ、會カ、句コト、過ス、三ミ、句
 綴ツグ、五イ、句
 老オ、母モ、草クサ、ララ、ウウ、ボボ、草クサ、カカ、ササ、ララ、モモ、トト、唱ナ、テテ、ハハ、老オ、母モ、二句
 求モト、守モリ、二句
 四ヨ、會カ、句コト、過ス、三ミ、句
 蓮花衣ハスハナキ 如ニ、裝シ、安ヤス、折マ

飛トビ、頭カビ、聲コエ、飛トビ、口クチ、見ミ、後ノチ、し、短ミ、首カビ、も、白シロ、前マエ、
 東ヒガシ、風カゼ、菜ナ、地チ、榆イ、我ワレ、毛モ、香カ、二句
 裕ユク、ワワ、キキ、ママ、ケケ、照テ、明アカ、二句
 閃ヒラ、刀ヤ、紙シ、木キ、龍リウ、藤トウ、高タカ、二句
 宗ソウ、祇キ、禿ツ、一イチ、段ダン、の、事コト、と、疑ウタガハシ、之シ、後ノチ、清キヨ、鉈クサ、割ワ、櫻オウ、の、部ベ、も、裁キ、
 たり、左ヒダリ、よ、抄シヨウ、す
 宗ソウ、祇キ、禿ツ、一イチ、段ダン、の、白シロ、川カハ、一イチ、玉タマ、と、此ココ、や、よ、箱ハコ、は、の、糸イト、を、こ、
 つ、一イチ、と、毎マイ、月ツキ、連レン、歌カ、の、千チ、句ク、を、催メダス、す、宗ソウ、祇キ、禿ツ、中ナカ、の、ま、と、其ソノ、糸イト、を、連レン、
 たり、と、起オキ、く、一イチ、か、の、段ダン、あり、女メ、の、綿ワタ、を、筆フデ、で、水ミヅ、
 通ト、り、し、と、宗ソウ、祇キ、禿ツ、ま、の、あ、ら、は、な、り、か、と、い、ひ、し、時トキ、御ミ、女メ、

あはくまの勝より、心點の腹より、うらむる可し。之る
あはくまの勝より、心點の腹より、うらむる可し。之る
あはくまの勝より、心點の腹より、うらむる可し。之る
あはくまの勝より、心點の腹より、うらむる可し。之る
あはくまの勝より、心點の腹より、うらむる可し。之る
あはくまの勝より、心點の腹より、うらむる可し。之る
あはくまの勝より、心點の腹より、うらむる可し。之る
あはくまの勝より、心點の腹より、うらむる可し。之る
あはくまの勝より、心點の腹より、うらむる可し。之る
あはくまの勝より、心點の腹より、うらむる可し。之る

○何處の所。劉禹錫が松滋渡望峽中（三昧詩に載す）に十二
碧峰何處所の句あり

○好醜大明則物不契、賢愚大明則人不親（沈氏語）

○有德即是有福、無機即是無禍、因事即是處事、讓之即
是勝人（沈氏語）

○天童謂予に、學字中孝の字あり、教字は孝を起とする
なり

○褚遂良曰、朋友深交者易怨

○須是盡去舊習從新做起、乃有大進、張子曰、濯去舊見
以來新意極有益。宣德五年閏十二月初二日夜、余在辰州
府分司、晝至五更、忽已德所以不大進者、正為舊習纏繞
未能掉脫故為善而善未純、去惡而惡未盡、當自今一刮舊
習一言一行求合於道否則匪人矣

○一念之非即遏之、一動之妄即改之

○古人功名不立有憂老之將至者、吾於道德無成亦憂老之
將至。誠心如此

○康仲俊年八十六、極康寧、自言、少時讀千字文有所悟
、謂心動神疲四字也、平生遇事未嘗動心故老而不衰

○觀書惟寧靜寬徐鎮德則心入其中而可得其妙、若躁擾福

急粗畧以求之、所謂視而不見、聽而不聞、食而不知其味、

○自家一箇身心尚不能整理、更論甚政治

○靜春先生劉子澄朱文公高弟也、病革、周益公往拊之曰

子澄澄其慮、靜春開目微視曰、無慮何澄、言訖而逝

○心無機事、案有好書、(梁掛釣竿)飽食晏眠、時清體健、此是上

界真人(口筆)

○傅玄席銘曰、閒居勿極其歡、居其安無忘其危

○唐子西詩云、山靜似太古、日長如少年

○一為外物所誘、則心無須臾之寧矣

○買無用之物者、賣有用之物

○奢者富不足、儉者貧有餘、奢者心常貧、儉者心常富

○千載奇逢無如好書相遇、一生清福無如佳事相仍有天外

之片心、然後有驚人之奇句、(小意情紀)

○裘萬頃字元量、不樂仕進、以蒼者召為司直、在朝賦詩

曰、新築書堂壁未乾、馬蹄催我上長安、兒時只道為官好

、老去方知行路難、千里關山千里念、一番風雨一番寒、

何如靜坐茅簷下、翠竹蒼梧仔細看、(遂促歸 八股)

○賈長江詩云、竹籠拾山果、瓦瓶挾石泉、于良史云、掬

水月在手、弄花香滿衣、陳后山云、月到千家靜、林森一

鳥啼、劉賓客云、寒樹鳥初動、霜橋人未行、魏仲先云、

燒葉爐中無宿火、讀書牕下有殘燈、曹杓云、汲水疑山動、

揚帆覺岸行、王維云、桃紅復含宿雨、柳綠更帶春煙、

○六經之後、便有司馬遷、三而五篇之後、便有杜子美、六經

不可學、亦不須學、故作文當學司馬遷、作詩當學杜詩、
二書亦須常讀、所謂不可一日無此君也
○唐末一山寺有僧卧病、因自題其戶曰、枕有思鄉淚、門
無問疾人、塵埋床下履、風動架頭巾
○王直方詩話云、温公嘗款趙舍人庵曰、清茶澹飯難逢友
濁酒狂歌易得朋
○謀生待是何時足、未免得闲方是闲
○一人之心即天地之心、一物之理即萬物之理、一日三運
即一歲之運、故曰、不出戶而知天下不窺牖見天道 丹鉛總錄
○陸龜蒙不品世以人交誰能以不得免、親意伏臘表為未嘗
及河往、世事系小舟一東去茶室華林釣具權船而下、小
不食言徑還不問

○韓退之自言、作為文章上規姚姒盤詰春秋易詩左氏莊騷
太史子雲相如、闕其中而肆其外、柳子厚自言、每為文章
斥之書詩禮春秋易參之穀梁氏以厲其氣參之孟荀以暢其文
參之莊老以肆其端參之國語以博其趣參之離騷以放其幽參
之太史公以著其潔此韓柳為文之旨要、與者宜思之
○錢若水為舉子時見陳希夷於華山、希夷曰、明日當再來
、若水如期往見、有一老僧與希夷擁地爐坐、僧熟視若水
久之不語、以火箸畫灰作做不得三字、徐曰、急流中雷退
人也、若水辭去、希夷不復留、後若水登科、為樞密副使
、年才四十致仕、希夷初謂、若水有仙風道骨、意未決、
命僧觀之、僧云做不得、故不復留、然急流中雷退去神仙
中不遠矣、僧麻衣道者也

言行錄
前集
二十一

○簡居録曰、書室中修行法、心間手懶則觀法帖、以其可
逐字放置也、手間心懶則治近事、以其可作可止也、心手
俱閒則寫字作詩文、以其可以兼濟也、心手俱懶則坐睡、
以其不務於神也、心不甚定宜看該及雜短故事、以其易
於見意不帶於文也、心間無事、宜看長篇文字或經註或史
傳或古人文集、此又甚宜於風雨之際及空夜也、又曰手閒
心閒則思、心閒手閒則臥、心手俱閒則若作書字、心手俱
閒則思早畢其事以寧吾神

○楊蟠春日獨遊南園詩、天淨鳥飛遠、路幽花自香、春風
吹草木、野水滿池塘、車去青山在、人間白日長、興來搔
短髮、微意久難忘

○唐の孔極侍郎朝より降り雨を一叟の庭下に避け且つ油

衣を借らんとす、叟の曰く、某寒不出、暑不出、風不出
、雨不出、未嘗置油衣也と、孔公不覺頓に官仕を厭ふ
○以武王之聖而不知夷齊之賢豈非命歟、亦王少也才力
有也寧ろ愚也愚者也

○所行者善則吉、所行者惡則凶、所謂無卜筮而知吉凶也
、予ん寸水も易の用可らんや

○李太白一斗百篇授筆立成、杜予美政最長吟、予不為、
二公蓋亦互相微嘲、太白贈子美云、借問因何去瘴生、只
為從前作詩苦、苦之一辭微其困凋也、子美寄太白云、
何時一樽酒、重與細論文、細之一辭微其缺鎮密也

○一念之善果靈慶雲、一念之惡烈風疾雨
○是非不到釣魚處、榮辱常隨騎馬人

○宋管師復自號臥雲先生、仁宗召問曰、卿所得何如、對曰、滿塢白雲耕不盡、一潭明月釣無痕、臣所得也
○晋の太元中桃源に入りたる者、武陵の漁人姓は黃、名は道真（桃花源記）

○陽翟縣有杜生者、不知其名、邑人但謂杜五郎、不知去村三十五里、惟屋兩間、其前空地丈餘、杜生不出於門三十有矣、黎陽尉嘗訪之問其不出門之因、杜生指門前一桑曰、十五年前本嘗此下納涼、但世用于時、偶不覺耳、問其為生、曰、日惟吾人擇日及賣一葉以供饋粥、後子能耕、自此食足擇日賣葉一切不為、又問、平日何行為、曰、端坐耳、問、頗觀書否、曰、二十年前嘗觀海名經、愛其義諦、今以忘之、并書亦不知在久矣、氣韻閑曠、詞清

簡有道之士也、盛名但布袍、草履室中榻然一榻而已、八股
○穗井田忠友、其著高名おろし、正以て某原定（虚齋の某）宿漫録の杜撰なりと指摘し、殘唐父子に至るはりけり、
○水と罵雲霧言を極めて蒼蠅とり、に至る、蒼蠅は佞人、譏者に比すべきなり、無學世識の者、このも、蒼蠅と罵るは謬見なり、忠友示せ此をよむはなり

○都穆、智永の千字文真蹟を石刻に於て之を大にして肥中といひ、永師の千字文一種二種ののみならず、偶々の大肥なるもの見ざるのみ
○虞世南、孔子廟堂記を進呈して王羲之の黄銀印一顆を賜けり、と鐵網冊記せり
○唐の太平公主甚樂教諭を蒙り、後後老嫗之を竊ひ、

縣吏妲を捕ふるに妲驚きて之を熨下に投せること亦鐵網
冊物に記せり

○河原者。蓮響録其居の條に曰く、畧かくりやく河原に
居りゆえ河原者ともいふなり。河原者をめりて御覽あ
りし事あり。火のかりやくもの付食せしなり。

(蓮響録、高橋宗直、明和四年以前の著) (透孝不親所収)

○鄭端簡古言云、永叔毀擊辭、君實誡孟子、安石非春秋
、二程子改古大學、晦庵不用子夏詩序、皆不可解。

○總テノ書ニ讀傳(傳ハ瀧トアリタシ)アリト題シ、林自見
の雜說裏語(明和元年刊本)に記して曰く「一連一句ノウ
チ、又ハ人ノ名ニモ上ヲ引ク声ニハ下ヲ引キ、上ヲハネ
レバ下ヲツムル事アリ、是ヲ一連ノ屈伸ト云フ。譬へバ

喜撰法師・道因法師ノ類、上ヲ撰因トハヌル故、下ヲ法
トツムルナリ。惠慶・西行ナトハ上ヲ慶行ト引ク故ニ、
下モ法師ト引クナリ。以餘經ニ佛意ヲブツチ、佛書ニテ
ハ无論ヲチヤク、醫書ニテハ厥陰ヲケツチト唱フル
類數多ナリ。猶更神書歌書ハ訓ニテ讀ムニ、其ノ書ニ限
レル讀方ノ文字アリ、或ハ佛書ノ中ニテ禪録ノ如キハ別
ニテ各別ナル文字ツカヒ多ク、常ノ言語器物等ノ雖モ、
一宗ニ限レル事多クナリ。亦官家ニテ書フ文字讀方、其
事ノミニ限ルコト間アリ。荷前ノ使・定孝等ノ音義、外
ノ書ニテハ不通、國名ニ至ツテハ近江・常陸ハ是ノ國辨
ニ限レル義訓ニシテ、是亦一向外ハハ不通、又祭祀等ニ
ハ積(祝トモ用フ)詞・車樂等ノ類、故擧ニ違アラズ。或ハ

二十四

五音相通トテ、狐キヌラクツネト讀ムテモ同事ナリト云フ、
或人曰ク、イカニ相通ニテモ唱ヘテ耳ニ立ツ事ハ不相通
モ讀傳タルヘシ、如何トナレバ、葉平ノ誼ニ、ホ音殿街
談トアルヲ、クソ殿街談ト誦アラハ聞キニクナラシト云
フ理リラカシ。

○同書に曰ク、支那ハ韻語ニシテ、體ヲ後ニシ用テ先ニ
ス、韻語トハ譬ヘバ東西ト声ニテ讀メバ不通、ソレヲ日
本ニテハ直ヒガシニシト言フニヨツテ文字ヲ見ズシテ
早ク通ス、又體ヲ後ニスルトハ、治國守身ト言ヘバ固ト
身ハ體ニシテ治守ハ用ナリ、是ヲ日本ニテハ體ヨリ用ニ
及シ讀ム故、文字ニカ、ワラズシテ其義通ズ
○同書に又曰ク、漢土ノ書ハ點ナク直ニ讀ム、漢土ノ注

新數十字ナルヲ、日本ノ和語一字ニテ數十字ノ意味
ヲ述ブルハ和語ノ妙ナリ。杜詩ニ感時花ハナ賤シ候トキ（天童謂
フニ感カ時トキ花ハナトスベシ）恨イラ別ワ鳥トリ驚オドロ心ココロ（天童又謂
ハ賤シ候トキ以レ方カタ恨イラ別ワ故ユ鳥トリ聲コエ雅ニ嘉カ、ト聽ミ之ノ反サカ為レ驚オドロ心ココロ云々。此
ノ註三十一字ノ意ヲ和訓ニシテ點スルニ、花ニモ鳥ニモ
ト云フニモノニ字ニテ、甚タ獨ニカ註ノ意ヲ述ベ尽ス、此ノ
餘思フトイハハ自己ノ思ハシトイハハ未來ノ思ヒシトイ
ハハ過去ノ思ヘトイハハ下知ニナル。如此同字ニテサマ
サマ分ツ事知語ノ妙ナリ。

○丹鶴叢書刊行ノ由來 過眼錄（續）石十種所収ニ由ルニ
熊野新宮ノ領主（市ヶ谷淨瑠璃坂二十五邸）水野土佐守妻腹ノ女

子美人ナリケルガ大奥ニ奉仕、將軍ノ妾トナリ、水野土
佐守ハ女謁ノ僥倖ニテ願ヒ叶ヒ、新宮ニ遊女屋ヲ建テシ
ヨリ諸國ノ大船入津シ、從ツテ領地富ミケレバ、普通ノ
書肆ノ利益打算シテハ企圖シ難キ贅澤ナル丹鶴叢書ヲ刊
行^三得^ルトナリ。コレヲ以テ見シバ女色モ遊女モ世ノ文苑
界ニ大ナル功ヲ奏セリトイフベシ、蓋シ土佐守ハコトヲ
善用セリトイフベキ歟。

○蕪太の俳諧七柏集に月集(天明元年)存して曰く畧古にて
もよきは美く、今とても悪きはあろかるべし、月をあか
しとリひ雪を白しとほの事ハ、何ツは難かるらん、姿五
尺の杜若とのひらつた、詞彌生ハ鶯とせどらめた、低き
を語りて高きに遊び、愚かなるやうにてかゝるべきをきか

むるにこそあれ、心の泉は深くとも、口にはその腹に味は
は、世この人こと勝を同うして遊ばざらぬやも畧下
○俳諧師の俳諧字。俳諧は月夜(元文四年)撰、在原栢編
序に曰く、先生(其角)を扱す姓榎下、詩煩瑣字音更種實井其
角、其先江州人也、奈有才名、性好風雅、從沙村季吟、而學吟甚高
其質、授以萬葉集源氏物語及御傘埋本等之書、傳矣、天和中、
間蘆翁在武陽起正風、即行結序於薔菴、共同趣也、昔感蘆翁之
吟咏、遂出陰陽造化、自屋箱弟子、貞享之始、與蘆翁而激更立
俳諧新式、若干條、乃改俳字作俳、是一派之大意、而鴻基所以開
於茲也。

○諸葛亮子瞻、字思遠、艾遣書語瞻曰、若降者必表為瑯琊
王、瞻怒斬艾使、遂戰大敗臨陣死、時年三十八。

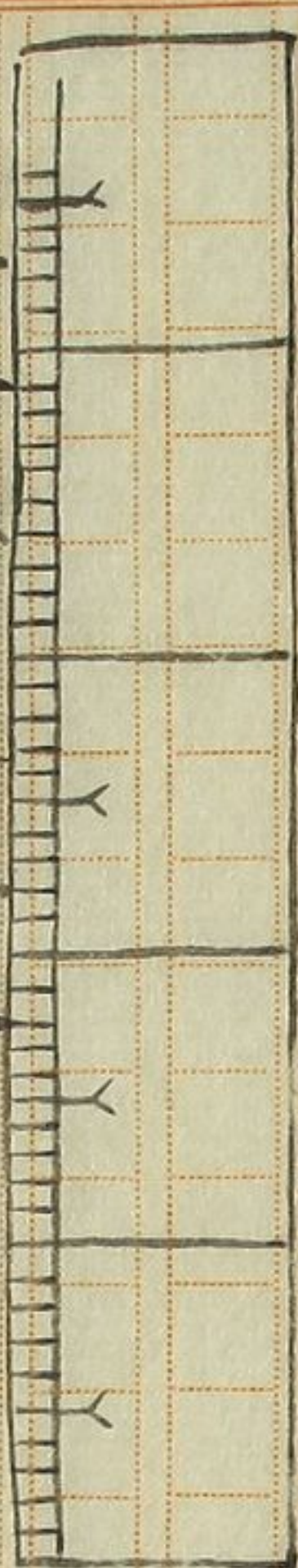
○宋の功臣趙普、論語一書を以て太祖太宗を佐く。

○庶莫從佗寄唐俗語也、羅大經云、詩家用庶莫字、蓋今俗語所謂佗教者是也。

○支那人は字音によりて左右せらるゝ事あり、宋の桑維翰が進士を試みらるゝ時、試官が維翰が姓の桑が桑と同音なまゝを以て取らざりしとなり。維翰志堅く鐵硯の故事あり。

○沈約四聲の説を為す、雖も流く上下に信せらるゝ、宋の武帝嘗て周捨を問ひて曰く、何を四声とりしや、捨曰く天子聖哲是なりと、中領軍朱异は曰く、天子萬福と、帝曰く、天子を考は豈は四声なりとらんやと、

○積古齋鐘鼎彝器款識に左の圖と説あり



右晉尺之半于此倍之可得其全度

○古今類書纂要叙

夫學者不能探玄扶微而句比之字櫛之非大學門也然學者譚玄扶微而叩以某文何解某事何據茫無以應非大學問也致知格物當下度出金鍼爾雅一書格物之祖郭景純稱其為九流之津涉六藝之鈐鍵學覽者之潭奧摘翰者之華苑余謂未悉其蘊也自是而後如焦澹園所云學古貴乎博患其不精記事貴乎要患其不備古昔所傳貫綜翻駁約而成書類家始焉魏皇覽而外若徐勉劉孝標劉杳陶隱居徐堅虞世南諸人相繼而作或紀故或紀文皆以備遺忘便論討其功當不在爾雅下顧類書之為道難矣嘗憶遷之為史坑焚之禍方熄往牒散亡吾以五十萬言為

詳及固承遷後向歆之徒出矣徵文獻於當時八十萬言吾則以
為畧書至於今毛櫛鱗次磨如落葉難掃而古籍仍似晨星假令
詳願者未必較孤取衷粗備者不過食葉作繭是略其畧而不能
詳其詳也夫何貴於是龍丘璩若朝聘展蠹焚燈困於學不董
以山林死思一生所為運入眼根隨落腕下凡天地古今綱常倫
紀鳥獸草木宮庠服食器物已稍提挈其綱領剖析其文義胡
容以自覆乃復更定逾年梓不以諸同好授余讀之目如于總如
千卷一詳一略易人所難語不效古而近事畢收事不效奇而有
資必錄真格物書裁劉熙之名之於價各有義類百姓日稱不
知其所以吾知免矣迺吾觀於昔為是學者非尋朝卡開局為之
則身居秘閣家有賜書煇煌以竭力纂得且也僻居浙隅不識何
以至是也其殆徐劉輩後身耶或謂類書寧譎而古毋覈而今寧

稗而奇毋正而典若是則據君誦矣不知貨殖家珠璣象貝日充
於市而膏醬取脂亦相灌輸大醫王丹妙青芝珍為上品而馬渤
牛溲亦備不測溲之可以造道溲之可以治瀉若此編者亦不茅
景純所稱而已也余且披之以遊以當張華之苗在車子之五車
天啓改元清明後一日 古廉城沈際飛天羽父題於芸窓

○奇跡考序

醒、老人好事士也。然其夢不死牛首蛇類之書。天七地五之史。
平生喜著小說野史以斷理之言。善述人間常情。使歷如實無如
有。又使讀者不喜不憂。不樂不悲。不知手舞足蹈。是以無遠近
各上下莫不知醒之而悅之者。嗚呼醒之為信謠妄用之言而何
使人至于此乎。蓋醒之說世於筆端者其素志必不然也。頃採二
百年未可觀不聽者。名曰述世奇跡考。又文人任俠。及俳優娼妓

之後、事跡不傳者、訪之遺居、探之墳墓、以傳沉没不傳者、訂潤色
失實者、必地理沿革街巷遷移考之、地圖訪之、古考遺器舊物、
徵之好事家、乃至童叟俚言之類、悉記以存焉、行正之嚴、考據之
精、毫末為附會之說、實異乎前日錯謬之作矣、雖之好事、於是
可見矣、夫人徒稱高遠、遺早近、醒之則欲自卑、近至高遠、其用心
之良有見解、世之悅醒之、知讀此書而後知其有真不悅者也矣、
文化政元仲夏、聽而樓主人題

○高洋、東魏の渤海王高歡の子なり、内は明決にして、
外は愚なるが如し。或時、高歡子供の智を計り見ん為り、
乱れざるを、絲をとり出して、それを元の如くすべしと云ふ
付ければ、高洋これを見て解うんとせしむ、刀を
とり出して中より切つて曰く、「乱れざるは必ず切らざらん」

と、後、此高洋、終に東魏の天下を奪ひけり

○郭林宗は人を相する名あり、農士樹の陰に集まり、兩宿
り居たりけるは、一人正しく座して其相他を越えたり
林宗立ちりて其名を問ふ、茅容と答ふ。林宗宿を乞ひけ
ければ、誘ひて家へ帰る、内は老母あり、茅容鶏を割き
て膳を調ふ、林宗は我を饗したるを、見ると、戸は
なく、其母はあまらせて、林宗と己は食せず、林宗驚き
立ちて拜して曰く、賢なるかな茅容、汝無げ、天下の賢
者と成るべし、とてその習はせしめば、終に名高き人と
なり

○董仲舒は天下の賢才のなり、或時、帷を閉りて獨詠
吟す。忽ち客あり、風姿尋常ならず、座して五經を

論ず、辨舌流る、如し、仲舒漸く屈服又及んで、か厚との博學者當時何國も存りともきみず、若非常のものならんと即ち是に謂つて曰く「巢の居て風を谷け、穴之處にては雨を知る、蓋しなんぢ狐狸もあらす也」と、容此言に色動じ、形破れて先狸となりて走り去るとなり

○晋の嵇康は先莊の道を好む、博學ありて高才の譽ある人なり。或時、燈の下に琴を弾じて居けるが、色黒く丈高き妖物、その前より出て来る、嵇康驚く氣色もなくして、つらつらしてこれを見て、魑魅と光を同じうすることとを恥づといひて、燈を吹き消しければ、妖怪のものも忽に消えて再び出づることなかりしとかや

○手問弘景。陸鶴銘の善本を見ざりしに、二銘中堂集録

○人強念がり又情心事あれば指を繋む癖のあるものなり、若より支那などもある事と見え、淮南子の本經訓に、能愈多として徳愈薄矣、故に周鼎倭を著けし其の指を銜ましむ、以て大巧の考すべからざるを明かす也とありて、註に倭は堯の巧工、周鼎を鑄るに及び倭が像を鼎に著けし、其の指を銜ましむ、假令らば倭在りて之を見らるも伎巧復た踰ゆること能はずして但だ當に其の指を銜繋すべし、故に以て巧の考すべからざるを明かすなりと。

一説に周人鼎を鑄、像を畫き、倭が身を鼎に鑄し、自ら其の指を銜ましめて以て後世を戒め、大巧を考すべからざるを明かすなりと。

編者附言、大巧徳を無みするか否かは暫く掛き、大巧

の極、潜水艦だ、飛行機だ、爆弾だと其の惨劇を来たし、人生時時太古の民の如く安穩なうざるを来た。難きは吾人の知るころなり。後世大哲人出て古に及し、其の時分の科擧者達の像の如く己が指を鷲むころの来は必定なり。昭和十八年八月記

若しいよく巧に奔らば、全世界の人類盡き、禽獸界魚のみの世となり。併し道徳の何たるを知らざる科擧者一点げりの者には本望なり。

その水が却つて

○義経記落丁。卷六、忠信最後の事の條、忠信の言葉に
 上鑑倉殿も左馬頭殿の御君達、我等が君も御兄弟がかり
 例へば人して申しけるは、小田原殿へ申し候ふ畧トア
 が意ヲナサヌ、有朋堂本・日本古典全集本等皆サツ
 テ居ルが元祿版ナドモ然リテ、早クカラ和本ニシテ丁度
 一丁落丁ニテ居ルノガ判ツタ、刊年不明ノモノダカ寛永
 頃カト思ハル、再録本ヲ見ルト左ノ文ダケ是リ又、人
 て申けるはノ人ノ下ニ
 乃ざんげんよりて御申不和ヲ有りたすも小ともこれそ
 さんけんむしつなほおほしめしなをしつらんときは
 あはれ一のおつらひなとらひもけすえんより志も
 へとんでありあせおちた立てさしめくさんくといふ

江馬の山田部あすつさきおけたるうとく三騎同一枕
に射伏せり二騎をなほせけり池の東の端を門外
へ向けて驚しに木の葉の影の如くむらめかしてを引き
にける後陣を見たまはし江馬とのかきさ五き十き
しあらはこそ敵は一人也返り合せ給へやとりけりて馬
の鼻をとつて返し逃行を中よりうめを敵こよせむの
甲冑も十合さしたる矢をばはけりて敵を射りて急
ひらをかぬりすて、太刀をぬきて大塚の中に乱れ入
て手もたまらす敵をふきりぬくる馬人のまらむなく
大塚そこにてまらけりてさく鐘つきしや身を的又かけ
て射させけり精兵の射るまらうらをかく小兵のいるや
はけすをわへりてたさきりけりまらともすきまたたつ

もめけりれと夢を見よむにうありとてしかくてももの
かぬぬものゆくと弱りてのちおさして首をとらんも
せん前ふは腹きらけやとどりひて太刀をうちふりて
えんよつとあるは西向く立ち合戦
トアル、コレ三積年ノ不審解ケタリ

○徂徠家言録に曰く「禮儀重義 藝術思恥」と

○天民讀書、世事讀書篇に曰く、問「世事紛冗不暇讀書、
廢學日久、為之如何、曰、所謂世事雖多、盡是人道、人
道不勤而更何為、學問之道不在讀書上、而在實行之上、
孔子曰、道二、仁與不仁而已矣、夙夜欲利人仁之方也、
夙夜欲利己不仁之事也、既而又曰、欲以閒暇讀書、則恐
無讀書之日、欲以有餘周窮、則恐無周窮之時

○花月草紙にいはいく、わの欲を欲もく、防うんとするはい
と難し、今日益より酒のまんずりは、明日は心よ任せ
このまますべしとくらふが如し、此の世は後の世なり、彼の
國よりは善く喜ぶの鳥、善く色香の花よりしてやと教ゆるは
その國の愚なる民くとのけりなき程も知られぬ、やりの

よも此世と言はば、君と親の恵をけなにと人々答へんと
かへり交しもありとかや。

○二宮尊徳曰く、大事を成さんと欲せば小さな事を怠
らす勤むべし、小徳りて大となればなり、此小人の常大
なる事を欲して小さな事を怠り、出来難き事を憂ひて
出来易き事を勤めず、それ故終て大なる事をなす事あり
はず、それ大は水の積んで大とあり、事を知らぬ故なり、
譬へば百万石の米と雖も粒の大なるものあり、千里の道も一歩つ
つ歩みて至る、山を作ると下簣の土よりなる事を明の
り辨へて勵精少ざる事を勤めば、大なる事な成るべし
少ざる事を怠る者大なるもの必出来ぬものあり。

○釋日本紀云、孝謙天皇の朝、淡海の真人御船勅を奉り
て神武天皇以来の謚を定めたまひあり、全く支那の謚
法を用ひたるあり、故に仲哀帝は冲哀帝なりべきを、紀
の書損か、誤謚なりと云傳ふ後あり。

○聖德太子碼御記文

本朝代終	百王尽威	二臣論世	兵乱不窮	王政不收
王命不用	惡世為宗	竭神祇威	無祭礼法	王法為臣
破之不用	王法為禪	毀之不崇	佛法滅故	王法即竭
上者為下	謀之加怨	臣者為民	乖之不隨	王法悞故
為侵兩法	鞅國君王	欣祈及王	生日城夷	為侵正法
輕毀勅許	謀犯王位	勳落王膳	成武勇法	為失正法
歸達磨教	出正法家	好與廢法	没正法物	倒弓箭賞

成禪行類 終り箭器 奪蒙古國

○曾永年が茶雁の一節。

人情のよろとらるる ねほく白頭を鄙く古さと貴む、凡
物のあつらひき 誠意のけ易し故をものとあつしけりし、
世の中はなべてこののやすきこそ 心解けたるのいひ
難きはくらくら 凝りてりしけし、茶宴の具は鳥糞及山
林の人の所為あり今も一こもふる清趣淡雅の士の佳玩
として同志の友を集めて咫尺の庭は千峰の雲を尋ね環
堵の室より古の春を占半箇の蘆雨は静に碧一榻の松風
と閑を催す、かゝる人としていふを難しきことある事
あるべしけむ、喫茶の癖はこそより清趣を雅と引 遊絲
の塵浮遊の罫をもいふよて、さればその器を閑する

も皆くうにだまふことなく新故をきくはずたゞきくら
けなるこそをうけはれ、少しく雅古なるはいとをうし
この故よちしよとつをともすなつても、ふる
しきは茶の本性と相和まぬその茶の性は清く水の性は
淡し、茶を好む人いけは清濁の懐春露の如くあるて
まねの三年穀雨の前一日ある茶園をわたりて 樵夫の楯
ける春の枝の弱芽を膚さし何よりあらむと推の焚火よ
熬るら柳の煙火は燃りたるのいほひを台つて夜りすの
ら焼炭のなごりし 暇は昔日の答記を撰纂してこの樵書
をつくり答筆の收閑のゆゑ同志の士とすべしとぞや
とてすん 清く居士曾永年

○古今詩刪より取りて 唐詩選に漏れた詩人

三三

陶翰 戎昱 杜牧 薛奇童 杜頴 鮑防 劉復 元結
 白居易 王季友 張鼎 韋元甫 李冶 韋承慶 崔湜
 李嘉祐 嚴維 竇叔向 姚合 楊達 孫欣 鄭嵎
 宋璟 沈東美 皇甫曾 以上二十五人
 ○詩と禪。滄浪詩話「論詩如論禪、漢魏晉唐盛唐之詩、
 則第一義也。大唐以還之詩、則小乘禪也。已落第二義矣。
 晚唐之詩、則聲聞辟支果也。」
 ○予持論として人の性は孟子の所謂善にもあらず、荀子
 の所謂悪にもあらず、機に臨んて善ともなり悪ともなる
 と信ぜしに、揚子法言に「人之性也善惡混」の語あるを見て
 其の信を堅くせり。
 ○非無安居也我無安心也、非無足財也我無足心也。墨子

○漢元帝の畫工賄賂よりして畫ける者一人毛延壽のみ
 ならず、陳敞、安陵、劉白、新豐、龔寬、陽望、杜樊育魏國の徒
 皆京市せらる。藝術家として最も愛むべし。
 ○夜譚隨錄、修麟中の語「不達時悟道」とあり。世に時あ
 く者には道を悟ること出来難きものと見ゆ。兔に角齋多
 寶也、高橋是清等は功成りて身退くとりし道を知らずして
 禍を遇へるなり。
 ○書法反隅を曰く「澄神朗慮如山影鑑池面、風神凜令身
 寒」蓋書道の秘訣也。
 ○南屏燕語を曰く「大智發於心於心何處尋成就一切義無
 古亦無今」蓋此語を讀誦すれば、物を忘れずと、僅に此
 二十字、僅に時を待たば忘る、三四が處に爰に書載す。南屏

燕語は松島瑞岩寺南山和尚の佛教的隨筆なり

○或水泳術の書に曰く「力を抜きて行ひ、業は何の効も
無きものなり。疲勞を推して行へば無理なる点を生じ其の
為に悪き癖を生ずる憂あるものなり」と

又曰く「數をわけて練習する際は、一ツ一ツ之を最後と
おりひて充分力を入れ、一杯又行ひ、勞水と覺えたる時
は其の所まで切り上げ、充分休みて更に行ふやうにすべ
し」と。(水上村游方)

○渝縻 墨の和訓、又曰く、地名と、蓋漢の時墨と出づ。
地なり。

○從吾所好。史記伯夷傳より出づ

○寵辱偕忘。范希文岳陽樓記中の語

○五山堂詩話卷に曰く「多讀不如精讀、多作不如精作と
又曰く「詩人無學、學人無詩」と、五卷

○顧炎武易經を校して、哲の一字を誤認と指摘せり。

○僧法顯、晉の姚興の弘始二年、長安を發遣し、其六年
中天竺に到達す。滿四年を費せり

○呂洞賓曰く「語りてわづり中より、聞きてききしひのむ
るは、心ありくしく學ぶるよりかざる徒の常なり」と、

○千歲奇逢無如好書良友、一生清福只在藥炉茗椀

○響榻又響榻。李日華紫桃軒雜綴に曰く「唐人遇古人墨
蹟、紙色沉暗者、坐暗室中、穴牖如盞大、懸紙其法書映
而取之、欲其透明畢見、謂之響榻。

○康熙帝殿上、聯對云く「日月燈 江海油 風雨鼓板
三五

天地人一大戲場 堯舜且 湯武末 操莽五淨 古今來

許多脚色 江山主人

○漢夏侯勝、謂諸生曰「生病不明經術、經術苟明、其取青紫如俛地拾芥耳、學經不明不如歸耕」

○梁孝元帝、敗に臨んで曰く「讀書萬卷猶有今日と、梁武帝、盛んに佛寺を奉じて猶侯景の難ありし」

○宗慤曰く「願乘長風破萬里浪」と、予は願ふ新緑の候に乘じて千里の旅より上ると、

○介子推の隱れ、る錦山は、山西の沁州に在り。

○春信は美、北齋は形、春章と清長は情、歌麿は情と美を兼ね。

○守官四字。勤・謹・和・緩、張觀之言

○釋和語要訣 自語 然天地之類也 轉語 轉上為君 轉高為聖

類語 略語 為日 為前 為後 為上 為下 為富 為貴 為高 為聖

借語 借上 借神 借為 借日 借前 借後 借上 借下 借富 借貴 借高 借聖

海機 為遠 為江 為部 為故 為是 為以 為加 為合 為時 為曉 為夜 為氣 為生 為勢 為類 為時 為界 為所 為轉 為高 為聖

生 畫有 月如 字如 海者 有以 和禮 合語 十為 字計 為淡 為海 為切 為近 為遠 為津 為淡 母子相

其 余 頗 可 知 而 已 矣 記 於 凡 秋 語 之 訣 大 概 如 此 推 類 而 旁 通 則

○陰陽歷日可盡廢 謝肇淛曰「余嘗以破日娶妻矣、不逾年而得雄。嘗以月忘上官矣、不數載而遷。嘗以天賊日解水

衡錢萬緡矣、而平無恙。嘗以空亡日出行旅任矣、而諸事盡遂。其餘小事不可勝紀。故謂陰陽曆日可盡廢也同感」

○謝肇淛曰「西家之東即東家之西、此一言足以破太歲之

謬矣。紂以甲子亡、武王以甲子興、此一言足以破陰陽之
忌矣。雞猪菘蒜逢着則吃、生死病死時至則行、此一言足
以破終身之惑矣。此非後世之言也、聖人已言之矣、曰、
死生有命富貴在天

○醒世恒言刊行書肆衍慶堂曰「本坊重價購求古今通俗演
義一百二十種初刻為喻世明言二刻為警世通言海內均奉為
艸架珍玩矣茲三刻為醒世恒言種々與定事之奇觀總取木鐸
醒世之意屏前刻共成完璧云」

又評者可一居士之序曰「此醒世恒言四十種、所以發明言
通言而刻也、明者、取其可以導愚也、通者、取其可以適
俗也、恒則習之而不厭、傳之而可久、三刻殊名、其義一
身云々。天啓丁卯中秋隴西可一居士題於白下之棲霞山房

唐富記
德三年

○日本關白平秀吉。今古奇觀卷第五、杜十娘怒沈百寶箱
之條有西夏時承恩 日本關白平秀吉 播州楊應龍之語。

○高倉天皇承安中、清原賴業表出中於禮記中自為之註、
賴業與宋朱熹同時、新注未傳本朝、自然暗合、人以為奇

○春秋二百四十二年、亡國五十二、弑君三十六(淮南子主術訓)

○勿為善。趙姬女臨嫁出門勅之曰、慎勿為善、女曰當為
惡邪、曰、善且勿為况惡乎、此語玄著(支海披沙卷二)

○清人孟涵九の和歌「やうはすにやくわうのかほもどま
いり今はのらうてやうやうのかほ」。竹の画「竹やう
ばあはみせうまおの心外と世のびの者やうやと」。
題「うづ」世の中はうへにめあつきがうにゆくあまの
蟹のあはれはくろくや」

又寶波村の人長崎よりてある歌「申こに心なうらし友
りも意の本草のあや夕のつゆ」
○井垣あま向く、故戸部申こは、昔之が「楊柳
本の下風の歌、風情をうらぐりてさけ水とも是をは心
ある歌をばゆきし、通昭僧正出家の時、歌女の許入
ならちねはやく水さてもむとさし向の我くらやこけ不
てすやまひはし」是る心ある歌のたゞと申すはまことな
り。和言・俳諧にも有心せむべし (俳諧葛後)